



■41日 公民館まつり (2023/3/9~11)

コロナ禍で中止になっていた公民館まつりが、3年ぶりに開催されました。やっと取り戻した表現の場に、作品も発表も熱の入ったものばかりでした。
諸々の事情により、展示、舞台発表ともに参加数は減少しましたが、大勢の皆さんで賑わいました。だんだんと日常が帰ってきたのを感じます。

目次

- | | |
|---------------------|--|
| 1-3 公民館まつり | 9 眼の眼
動物パトリンレー |
| 4-5 村内メディア座談会 | 10 川の集い
教育委員会だより
公民館の働き
戸籍の窓口
一喜一憂 |
| 6 子育て支援センター
きらきら | |
| 7 川上村の乗組 | |
| 8 体操サロン
真冬の大会 | |



茶道不言流教室



和室では茶道不言流教室によるお点前体験が行われました。
優美で繊細な所作に魅了されてか、いただくお茶は一段と格別でした。普段体験できない茶道に触れ、身の引き締まる思いがしました。



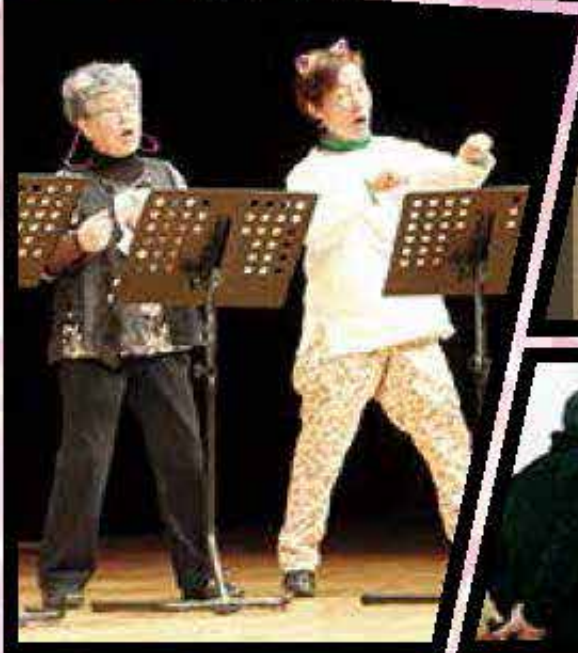
浅間吟道会

10年ほど前に生種学習教室を飛び出し、独自に活動を行っています。月に1度集まり、公民館まつりに向けて練習を行いました。

【参加者の声】
●内容は難しかったですが、本番であんなに盛々とした声が出ることに驚き、感動しました。
●声に張りがあり、皆さん生き生きとしておられましたね。

第41回 公民館まつり

新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年度、3年度と中止になり、ようやく今年度、第41回公民館まつりを開催することができました。
3年ぶりの開催となったため、展示、舞台発表とともに参加者が少なくなりましたが、展示、舞台発表にも思いを込めて、日頃の練習の成果を発表する場交流の場となるようにしていきたいと思っております。
公民館長 加藤 明男



そば打ち教室



2日目の10日にはそば打ち教室により、川上産のそば粉を使った二人そばが振るまわれました。提供前から行列ができて、予定の80食はすぐに終了し、急ぎよ追加するほどの盛況ぶりでした。

【参加者の声】

- 温かいゆめにそばの風味が最高！ お店で提供されるそばと遜色ないお味です。
- 未満席の子どもも、うれしそうに食べてくれてよかったです。



【出演者の声】

練習した成果を十分に発揮して楽しめました。

次は山菜まつりでも発表する予定なので皆さんぜひお越しください。

【保護者の声】

久しぶりに子どもたちも村民の皆さんの前で発表する場を持って、うれしかったと思います。ようやく、日常が戻ってきましたね。

リズムダンス教室



【出演者の声】

- ソロパートを堂々と吹くことができてよかったです。
- みんなとリズムを合わせて音を奏でることができました。

【保護者の声】

公民館まつりの締めにあつかわしい素晴らしい演奏でした。

卒業シーズンを合わせた曲で、いち早く春を感じました。



川上中学校 吹奏学部



村内メディア 座談会

KGV、広報かわかみを担当する企画広報係と、館報かわかみを手掛ける館報編集委員会。それぞれが担う役割と掲載内容の違い、取材や編集における共通の思い、村内メディアのこれからについて話し合いました。

館報編集委員会

— KGV・広報と公民館報の役割とは？

中島 広報は行政が発信する紙媒体で、紙面で補いきれない部分をKGVで発信しています。主な内容は行政、基幹産業である農業などの情報、子育てや教育について発信しています。さまざまな行事やお祭りなども取り上げて、関心を持ってもらおうと努めています。

林 公民館報は主に、公民館事業に即した記事を掲載しています。生涯学習教室や公民館まつり、各種スポーツ大会などの公民館活動が主です。教育、文化、生活に関する記事も取り上げ、村民の目線に近い内容となっています。

— 企画広報係3人のKGVでの役割分担は？

中島 我々は企画課の企画広報係に属しています。KGVだけではなく、広報の発行、ホームページの運営、総合計画の担当などの業務に携わっています。

KGVは主に私が担当しており、同僚の藤原や木田と協力して番組制作しています。

業務内容は撮影から編集、ニュース原稿の作成、番組

の放送です。カメラマンや編集担当など役割は決めておらず、担当職員は皆、一連の作業ができるスキルを持っています。

— 公民館報の方はどうですか？

林 発行の前月に編集会議を行い、企画・担当を決めます。取材はだまかなコンセプトを決めますが、どんなテイストになるかは担当の手腕にかかっています。大きな行事についてはカメラマンとして、機材を所有している者が赴きます。

集まった原稿は2人のオペレーターが、10日ほどかけてパソコンで割付をして紙面を作成します。一般的に紙面作りは印刷会社にお任せするのですが、館報かわかみでは自らデザインするのが特徴です。

中島 広報は性質上、各部署から上がってきた行政情報をもとに構成しています。我々では把握しきれない情報も、各課の担当が詳しくまとめてくれます。

藤原 行政情報の他、行事などを偏らないようバランス良く掲載しています。

情報収集が命
取材での苦勞とは

— 取材先など情報の吸い上げについてはどうですか？

中島 行事の日程、各施設の予約状況などを確認しながら取材先を選定します。村民の方からの情報提供や、取材依頼を受けることもあります。

— 相当数の取材をこなしているイメージですが、取材の頻度は？

中島 多い時で週15回、少ない時で週3回くらいです。1日に3回取材することもありますが、季節や行事によって波がありますね。編集にも時間がかかります。当初は1本のニュースを作るのに1日かかっていましたが、今では1時間ほどで編集できるようになりました。こだわり過ぎてしまうので、3時間以内には仕上げる意識をしています。

— 今までで大変だった取材はなんですか？

中島 御柱祭が一番大変でしたが楽しくもありました。関連行事が多く内容の詳細も知らなかったのですが、過去のVTRで予習をしてから撮影に臨みました。これはすべての番組作りを行う上で大切にしていることで、後任にも伝えていきます。

小林 館報は周りの方からの情報が大事です。地域の方や保護者の繋がりから聞くことが多いですね。

また、編集委員の構成も強みと言えます。年代、性別、地区が違うので、いろいろな情報を網羅できるのがいいですね。

— コロナ禍での状況はどうでしたか？

中島 コロナ禍はとにかく撮影するものがなく、番組表がスカスカでした。中学校の授業をオンラインで公開したり、その流れで英語教室を番組にしました。中止になっていた授業参観の代わりに、リモート授業参観も企画しました。

お家時間が増えたことに対し、思い出放送と題して過去のVTRを流したのもこの時期です。

林 館報も取り上げる行事がなく、巻末の「公民館の動き」が空欄になっているほどで、補うための企画を毎回考えました。

特に「川上村の素顔」のコーナーを前面に押し出し、個人を取り上げました。ここで問題になったのが取材の仕方でした。インタビューができないので、質問を送って回答してもらうという形式で取材しました。コロナ禍だからこそ取り上げられる題材を探し、苦勞しつつも企画力や取材スキルを鍛えられました。

伝えることの難しさ
試行錯誤の日々

— 番組作りのこだわりは？



中島 樹

藤原 将武

企画広報係



林 一幸

司会 中嶋 俊樹

館報編集委員会



館報編集委員会
(教育委員会より任命)

1949年創刊

年6回発行

公民館事業、行事

公民館、教育委員会
からのお知らせ

村内の出来事など

広報 かわかみ

企画課
企画広報係

1969年創刊

年4回発行

行政情報

村からのお知らせ
各種行事

村内の出来事など

聴者にも伝わらないので妥協せずに作っています。
「自身で一番感動した番組は？」
中島 最近ではパイプオルガンですね。映像も音楽もうまく構成できたと思っています。
小原 確かに！ 再放送を期待している視聴者がたくさんいます。
林 公民館報でも以前パイプオルガンを取り上げましたが、同じ題材でも表現方法が違うのが面白いですね。映像と音で感動させるKCMと、情報やバックグラウンドを資料として残す公民館報、それぞれの役割がはっきりした例だと思います。
中島 趣味である山登りの企画もこだわりの番組です。川上村の山を知っていただくのが意図でした。登山未経験の世代や、今は登れなくなったご年配の方にも届けたくて。
職員や関係者を同行させることで、人物の紹介にもなるので意味のある番組になりました。
小原 企画といい構成といい、とてもいい番組でした。村のうごきのエンディングが金峰山の初日の出になった時は感動しました。
また、コンビニエンスストア開店の放映も考えさせられました。総合計画での意見をとり上げたこと、新たな雇用が生まれたことな

どを紐付けていたので感心しました。
「アナウンスや取材で工夫していることは何ですか？」
中島 とにかく伝わりやすさが大切ですね。センテンスを短く、わかりやすい原稿がチェックしています。
お知らせの際「〇月〇日に××があります」ではなく「××が〇月〇日にあります」と先に出来事を伝えて、聞き迷がしないように工夫しています。
防災無線は反響を考慮して、間を多く空けてゆっくりしゃべるように意識しています。
小原 一視聴者としてとても素晴らしいと思いますし、称赞の声をよく耳にします。アナウンスの研修などは受けるのですか？
中島 NHKの研修を受けます。アナウンスはもちろんです。撮影技術・番組制作の基本をそこで学びます。また先輩方から技術の継承もしています。
林 公民館報でも以前、印刷会社の方を招いて研修をしました。漢字の使い方や表現方法、文章のルール、紙面構成について学びました。
お互い、知識のないところからのスタートなので、研修や勉強は必要ですね。
田中 館報では常にアンテナを張って、広く情報収集をするよう気を付けています。紙面を通して知ってもらいたい出来事や人物を、積極的に

ビックアップしています。記事作りに関しては、わかりやすく印象的な文章になるよう心がけています。
小原 行事やイベントの取材は、参加することが大切だと思っています。自ら体験することで参加者の感想に共感できるので、より厚い記事が書けると思います。
中島 インタビューの重要性は共通ですね。参加することでいい感想が引き出せます。
変化の時代
村内メディアは
どうあるべきか

「広報と館報のこれからについて考えることは？」
林 メディアの多様化によって、テレビ・活字離れが進んでいます。最近ではテレビを観ない世代もいますし、成人式のアンケートでは読書量が年々減っている傾向にあります。
「同じメディアとしてどうお考えですか？」
中島 ゆくゆくは、ネット配信も可能性としてあるかもしれません。村を離れて暮らす家族や学生が、配信で視聴できると面白いですね。まだまだ難しいですが、ケーブルテレビの設備が整っていて、番組以外の放送もあるので自主放送は続いていくと思います。
小原 子育て世代からは、

村の情報や瞬時に得られるようにデジタルで対応してほしいとの意見が出ています。ただ、高齢者の方が視聴できるような形を残すことは必要です。
藤原 広報は村政など重要な情報を掲載しているのでも手に取ってもらえるよう努力しないといけないですね。
林 今の時代、文章量が多いと読まれないので、写真も多くするなど見やすい紙面を意識しています。
両誌とも川上村のホームページにも掲載されていますが、完全に紙面からデジタルに移行する時代が来るかもしれないですね。
田中 村民の中には、広報と館報の区別がつかないという声があります。合併する可能性についてどうですか？
藤原 それぞれ役割が違うので、合併するのは難しいかもしれません。ですが広報と館報を一冊にまとめて発行している自治体もありますから、そういった対応は考えられるかもしれません。
これからの関係として情報交換や、写真の提供など協力体制を築けるといいですね。
「役割は違えど、共通する思いを確認できました。川上村におけるメディアとして、お互い使命感を持って頑張りましょう。」